

John Stuart Mill と教育
—Mill の教育観と現代—

堂野 真楠

1. はじめに

高等学校の倫理、あるいは数年前に話題に上った為、聞き覚えのある方も多いであろう⁽¹⁾、以下の文言、“It is the greatest happiness of the greatest number that is the measure of right and wrong⁽²⁾” — 所謂「最大多数の最大幸福」— この言葉は功利主義の思想を端的に表している。この考えの根底を支えている原理は Jeremy Bentham (1748~1832)の観察眼—*An Introduction to the Principles of Morals and Legislation* (1789)—から導かれた、“Nature has placed mankind under the governance of two sovereign masters, pain and pleasure. It is for them alone to point out what we ought to do, as well as to determine what we shall do⁽³⁾.” という人間に普遍的に見られる性質である。その当時までの思想や宗教、哲学では、人間の禁欲的な態度こそ善であり、模範とすべき道徳として考えられてきた為、この大半の人間に当てはまる性質に注目し、積極的に快楽を追求するスタイルは斬新であった。とりわけ、Bentham は「痛みを軽減し、快楽を求める」という人間の利己的だとされてきた習性を快楽量の計算や制裁によって、単なる一個人だけでなく、なるべく広域の社会全体としての快楽の追求へ繋がって行くことの重要性を主張した⁽⁴⁾。そして、Bentham はこの概念を立法や行政の方面にも適合させようと努力したのであった。同時に、その努力は当時隆盛を極めた産業資本主義と非常に相性が良く、自由や旧来の法律の改正を求める多くの資本家たちが Bentham の理論を哲学的スローガンとして借りていた⁽⁵⁾。

しかし、Bentham の功利主義は完全なものではなく、幾つかの問題点も抱えていた。その中でも、最もよく批判される点は、功利主義が社会、あるいはその集団の全体としての快楽のみを追求する為、過程における行為者の善性や感情面が度外視されがちなどころである。そのような功利主義の性格を私たちは Charles Dickens (1812~1870)の小説 *Hard Times* で読むことができる。冒頭、資本家 Gradgrind は自身の経営する学校の教育観について、少年少女に対する教育で最も重要なものは、“fact”（「事実」）であり、教える側はそれに基づく知識、そして、実際の技術のみを使える生徒を育てることに心血を注ぐようにと述べている⁽⁶⁾。*Hard Times* は功利主義への風刺的な意図が込められているため、誇張されているとも言えるが、この教育観は後に読み解く際に分かるように、John Stuart Mill (1806~1873)が受けた教育に共通する要素もあり、Dickens の感覚は鋭いと言ってよい。また、この情操なき教育のもとで、功利主義者となった

者たちは目先の快樂や利益のみを追究し、精神的に高尚なもの一芸術や利他的な精神、慈愛の心一が枯渇していると見なされてしまうことが多いのである⁽⁷⁾。

上記のような功利主義に対する「感情」や「精神的な高尚さ」の欠如、という批判は功利主義を信奉する者たちにとっては早急に弁護をしなければならない命題であった。そして、それを行ったのが Mill であった。本論では、功利主義の修正は直接のテーマではないので、簡単に説明するが、彼は物事の事実やそこから誕生した知識・技術だけでなく、それを学ぶ際の、また実際に用いる際の人間の精神面（「どのように感じるか」）に着目し、功利主義を擁護するようになった。それが「快樂における質の差」である。Mill は、前述のような師 Bentham の快樂の計算を歴史的に重要な分析方法とした上で、そこに快樂の質に対する観察がないことを指摘する。有名な文言である、“It is better to be a human being dissatisfied than a pig satisfied; better to be Socrates dissatisfied than a fool satisfied⁽⁸⁾.” が指し示していることは、まさにこのことであり、人が低級な快樂に陥り易く、またそれに耽溺しやすい習性を認識した上で、経験とともに高級な快樂、肉体的なものよりも精神的なものを選択し、それを最大多数の最大幸福へと発展させていくことを説いたのである。彼がそれまで功利主義が批判的であったキリスト教の教義に注目し、“In the golden rule of Jesus of Nazareth, we read the complete spirit of the ethics of utility. To do as one would be done by, and to love one's neighbour as oneself, constitute the ideal perfection of utilitarian morality⁽⁹⁾.” と理想を掲げたことは、功利主義者が、物質的・量的な側面からだけでなく、精神的な面から、個人の幸福と集団全体の幸福を考慮し、より高次な利他的な精神をもった最大多数の最大幸福の実践である。Mill はこの擁護を踏まえた上で、人間の個性と自由、その二つが社会全体の幸福と共存できる方法を分析していったのである。

かいつまんで説明したが、以上のような功利主義の変遷は、当然であるが自然発生的に起こったのではない。概ね、当時の資本主義社会の繁栄と矛盾の中で必要に迫られた功利主義者たちが努力を重ねて、修正を行ったのである。しかし、論者はその時代背景と同程度に Mill の受けた教育、そしてその中から彼が感じ取った教育観も重要な要素であると考えた。したがって、本論では、「教育」をキーワードに Mill の人生や著作を読み解き、結論を導くことを目的とする。

2. Mill の受けた教育の特徴

Mill の父親、James Mill (1773~1836) は Bentham の信奉者であり、同時に自身の言動や自説の出版に慎重な Bentham に代わり、功利主義を世間に広く認知させた功労者であった。そのような人物であったから、息子を功利主義の後継者として育てようとしたのは当然の流れであった。次世代を担う者として、必要な知識量や分析、思考、文章力、また弁論術を身につけるために James は徹底的な英才教育を Mill に施した。その教育の特徴はいくつかに分類できる。まずは、古典の早期教育である⁽¹⁰⁾。Mill は三歳の時にギリシャ語を、八歳の頃からはラテン語を教えられ、並行してそれらの言語で書かれた古典 (Herodotos や Xenophon、Platon、Vergilius、Horatius、Aristoteles 等、枚挙に暇がないほどの著作) を読んだ。次に膨大な読書量が挙げられる。彼は古典から発展して、知識の蓄えとして様々なジャンルの本を読むように指示され、厳格な父の指導の元、それに素直に従ったのである。

しかし、今日以上に書字文化が主流であった当時、Mill の古典教育や読んだ本の数は特別、並はずれたことではないだろう⁽¹¹⁾。特筆すべきは、James がインプットだけでなく、アウトプットを強く意識していたことにある。一例として、父 James は当時既に刊行されていた David Ricardo や Adam Smith などの著作を教科書として、Mill にそれらの論考の要約と問題点の発見と是正について、マン・ツー・マンで徹底的に議論する教育 (今日でいうところのディベート教育に該当するもの) を施していた⁽¹²⁾。この教育の目的は論理的な思考力の養育であったが、非常に効果があったようで、Mill 自身、“Such a mode of instruction was excellently calculated to form a thinker;” と述懐している⁽¹³⁾。

このように、インプットとアウトプットをセットで行う学習法は今日でも一主に高等教育で一見られるが、幼い頃から訓練として行われたことは、Mill の受けた教育の最大の特徴であると論者は考える。それと同時に、この教育の弊害も無視することはできない。理由はそのアウトプットの方向性にある。前述のように、Mill は古典から始まり、当時の多くの著作を読んでいった。その中には、当然文学 (特に詩) も少なからず含まれていたが、父 James はそういった文学作品における事実のみの観察や実利的な面 (散文より韻文の表現の方が効果的であり、大衆が詩をその価値以上に受け取る傾向) を重要視していた。James が Milton を絶賛する一方で、Shakespeare を崇拝す

るイギリス人を批判していたのも James の文学への否定的な態度を示している。また、*Autobiography* の chapter II では、感情、特に情熱的な感情に否定的な父親の様子が語られている。このような父のもとであったので、件のインプットとアウトプットにも偏りが発生していることは想像に難くない。特に、アウトプットにおける要約、問題点についての議論は、意見をぶつけ合い、洗練させ、明確な答えを求めて行くというスタイルのため、Mill の純粋な感情や感性を常に犠牲にするものであった。つまり、この教育方法は Mill が言う通り、思想家の育成には効果的であったが、情操の面はほとんど考慮されていないものであった。加えて、父 James の徹底した無宗教教育と同世代との交流の実質的な禁止も相俟って、後の Mill の精神の危機へと繋がって行くのであった。

3. 精神の危機と Mill の独自の路線

幼児から青年期における過激とも言える主知主義教育の結果、Mill は 1826 年、20 歳の時に精神的に無気力で不安定な状態に悩まされることになる。この「精神の危機」に至る理由には複数の説があるが、やはり前述のような教育が深い影を落としていると論者は考える。その根拠として、Mill の精神の危機からの回復にいたるきっかけが挙げられる。そのきっかけには二つのフェーズがあり、一つ目はフランスの劇作家 Jean François Marmontel (1723~1799) の *Memoires d'un père, pour servir à l'instruction de ses enfants* (『回想記』) での読書体験で、主人公が家族の不幸に遭い、悲嘆にくれるも、亡くなった父の代わりに家族を支えようと決意する場面に感動し、涙を流した時である。彼はこの体験で、自己の感情が枯渇していないことを認識し、幾分心の平穏を取り戻し、それまで以上の憂鬱に悩まされることはなかった。この父親の死から立ち直る少年に感動した点から、フロイト心理学的な視点で、Mill の精神的な父親との別離（もっと率直に言ってしまうと、「父殺し」）を指摘する研究もあるが、その分析は本稿で述べたいこととは直接は結び付かないので、これ以上は言及しない。従って、ここでは主に二つ目の局面について触れる。それは、Mill が精神的に衰弱していた時に読んだ、William Wordsworth (1770~1850) や Samuel Taylor Coleridge (1772~1834) の詩作に深い感銘を受けたという点である。特に Wordsworth の詩には大きな慰めを得たらしく、詩人の詩における素朴な田園風景や自然美に対する原始的とも

言える心からの共鳴に深く感動している。このような感動の理由は、やはり先程述べたような教育に欠けていたもの、また存在はしていても教育と共に摩耗してしまう人間の感受性の重要性を Mill がはっきりと自覚したからであろう。父 James の教育では得られなかったものとして、Mill は感情の陶冶を考えるようになったのである。この認識の変化は、Bentham から続く観察や知的な分析を最優先する教育から半歩抜け出すという Mill 独自の姿勢の萌芽と言えるだろう。彼はこの精神の危機の後、様々な思想家たち—Coleridge とその弟子、Saint-Simon 派、Thomas Carlyle (1795~1881)—との交流や Harriet Taylor (1807~1858) との交際を経て、自身の論説を構築していくことになるが、その基本となるスタイルは父のような一つの方向で徹底的に分析していくものとは異なり、折衷主義的で共感の精神をもった、論敵の思想の中にも真理を見出そうとする独自の路線を取るようになる。これは Mill の受けた教育における一つの結果でもあり、また同時に彼の教育観にも繋がって行くものでもある。

4. Mill の教育観

Mill の教育観の全てに触れることは難しいので、本論では彼の“Inaugural Address Delivered to the University of St. Andrews”（「大学教育について」）をもとに彼の教育観について読み解いてみたい。彼は大学の役割について、以下のように述べている。

It [University] is not a place of professional education. Universities are not intended to teach the knowledge required to fit men for some special mode of gaining their livelihood. Their object is not to make skilful lawyers, or physicians, or engineers, but capable and cultivated human beings. (218)

Mill が受けた教育では、専ら知識の蓄えとプロとしての思想家の育成を主としていた。仮に彼が精神の危機を経ることがなければ、このような意見を持たなかったのではなかろうか。Mill は自身の経験から、知識や論理的思考と同じくらいに教養や情操面の陶冶を強く訴えている。何故ならば、Bentham のような功利主義のもとでは、常に社会全体の幸福を考えることが第一とされるため、個人の心に抱いたささやかな幸福感や苦痛を伴ってまでも得たい高次な快樂への欲求は無視され、常に明確で実利的な利益を求めざるをえない。結果、人類が得た知識や技術は必ずしも高尚なものへ用いら

れるとは限らず、結果的にマイノリティーの弾圧などに繋がる危険がある。彼はその危険性を意識して、上の引用に続いて、こう補足している。

What professional men should carry away with them from an University, is not professional knowledge, but that which should direct the use of their professional knowledge, and bring the light of general culture to illuminate the technicalities of a special pursuit. (218)

Mill は知識や技術の単なる効果的、専門的な利用ではなく、いかにそれを正しく用いるかの重要性を説いている。そして、その実践として、当時の大学教育における論争であった、古典・文学教育と現代科学・技術の教育、どちらを優先的に教えるべきかについて、彼はこう語る。

I can only reply by the question, why not both? Can anything deserve the name of good education which does not include literature and science too? If there were no more to be said than that scientific education teaches us to think, and literary education to express our thoughts, do we not require both? and is not any one a poor, maimed, lopsided fragment of humanity who is deficient in either? [...] Short as life is, and shorter still as we make it by the time we waste on things which are neither business, nor meditation, nor pleasure, we are not so badly off that our scholars need be ignorant of the laws and properties of the world they live in, or our scientific men destitute of poetic feeling and artistic cultivation. (221)

観察や論理的思考、あるいは発達した科学技術の利用で見落としがちなことを Mill は自身の経験をもって教えてくれている。彼は実際のなものや精神的なもの、双方の重要性を訴え、広い視野と深い教養、感情面の点を忘れずに総合的に物事を判断する人材の教育を期待している。

5. まとめ Mill の教育観で現代の大学教育を見る

かなり駆け足の考察となってしまったが、教育のキーワードの元、Mill と教育について追ってきた。その中で、彼は自身の精神をすり減らしながら、功利主義者として必要な教育、あるいは思想家育成の為に限定された教育から脱却し、知識・論理的思考と感情・教養といったもののバランスの取れた教育観を持つことに至っている。今日、功利主義者として知られている彼であるが、質的な功利主義を訴えるのと同時に、

教育家としての一面も見られることは興味深く、また自身の経験が彼の教育観の重要性を体現していることはもっと世に知られていいと論者は考える。その理由として、昨今、我が国における教育、特に大学教育は大きな転換期を迎えており、奇しくも Mill の時代と同様に、科学的な知識・技術の伝授か職業や専門家の育成の焦点を置いた教育の二極化となっている。特に前者では、日進月歩で科学技術 (iPS 細胞等) が発展し、後者では「グローバル化」の元、ひたすら海外へ向けての人材の育成が声高に叫ばれており、2014 年 9 月 26 日に発表されたスーパーグローバル大学はその象徴と言ってよいだろう。しかし、Mill が言うように、人類が卓越した知識を得て、新たな技術を発見したとしても、それを正しい方向に、また、単なる利益のためだけではなく、人類にとってより高尚で全体を包括する幸福に繋がるために用いなければ、精神的なものは荒廃し、一部の者だけが幸福を享受する世界になるであろう。それは昨今社会を騒がせた論文や実験の不正、また技術が確立されても倫理や経済面での問題からは逃れられない点からも明白である。無論、Mill の人生から分かることや彼の主張は、単なる精神論に過ぎないと言われてしまうかもしれない。だが、Mill の経験とそこから導かれた彼の教育観を我が国の子女に対して、アイデンティティが確立される青年期に教養として伝道することができれば、前述のような問題に直面した際に彼らの精神面を支え、技術や知識を社会全体に行きわたる幸福へと昇華させてくれるだろう。Mill の教育家としての面は、女子教育の点も含めてまだ深く掘り下げて分析することは可能であるが、現代の視点で考えた場合、一番重要なことは、Mill が主張するように、知識や技術の習得や発見、確立には陶冶された精神が吹き込まれることだと私は考える。

付記

*英文学との関係が薄い本稿に関して、査読者の先生には直接的な専門ではないにも拘わらず、つぶさに読んでいただき、有益なご指摘と助言、また、激励のお言葉を頂戴した。そして、副手の方には非常に丁寧な校正をしていただいた。この場をお借りして、感謝の意を表したい。

注

*本稿の Mill のテキストは、*Autobiography and Utilitarianism* は Mill, John Stuart., Robson, J. M., ed. *Collected Works John Stuart Mill I Autobiography and Literary Essays*. Canada: University of Toronto Press, 1969. Print を底本としている。また、“Inaugural Address Delivered to the University of St. Andrews” は Robson, M. John., ed. *The Collected Works John*

Stuart Mill volume XXI Essays on Equality, Law, and Education. Toronto: University of Toronto Press, 1984. Print.を底本としている。

- (1) Michael J. Sandel 鬼沢忍訳『これからの「正義」の話をしよう いまを生き延びるための哲学 *Justice: What's the Right Thing to Do?*』早川書房 2010 年の第二章では、1884 年に起きた漂流時における殺人・食人行為の道德の面について功利主義の視点で論じている。また、本書を元にした実際の講義が NHK 教育テレビにて『ハーバード白熱教室』という題で全 12 回放送された。
- (2) Jeremy Bentham, John Bowring, ed. *The Works of Jeremy Bentham Volume One.* New York: Russell & Russell inc, 1962. p.227.
- (3) Ibid. p.1.
- (4) Bentham は行為者の行動の結果がもたらす幸福の量を、「強度」、「持続性」、「確実性」、「遠近性」といった「量」の視点と「多産性」、「純粋性」、「範囲」といった傾向性の面から導こうとしている。(Ibid. p. 16) また、彼は個人の利己的な快楽の追求と社会全体の幸福の齟齬の抑制として、苦痛と快楽の根源を辿り、そこから四つの制裁(物理的・政治的・道德的・宗教的)があるとして、これを利用し、個人と社会の幸福の一致を目指した。(Ibid. p. 14.)
- (5) 山田英世、清水書院 p.110.
- (6) Dickens, p.5.
- (7) とりわけ、日本では「功利」という字面から、「利益のみを追求する利己的な性格」と誤解される傾向が強い。
- (8) Mill, *Utilitarianism*, p.212.
- (9) Ibid. p.218.
- (10) 父 James は John Locke が主張するような生得観念の否定、つまり人間の「タブラ＝ラサ」の概念に基づき、早期教育に拘ったとされる。
- (11) 小泉 仰は Mill と同時代の人物として、我が国の中村敏字や西周の受けた古典教育を例に挙げている。(小泉、p.20.)
- (12) Mill, *Autobiography*, p.31.
- (13) Ibid. p.31.

参考文献

Bentham, Jeremy., John Bowring, ed. *The Works of Jeremy Bentham Volume One.* New York: Russell & Russell inc, 1962. Print.
Robson, M.John., and Jack, Stillinger., eds. *The Collected Works John Stuart Mill volume I Autobiography and Literary Essays.* Toronto: University of Toronto Press, 1981. Print.
Robson, M.John., ed. *The Collected Works John Stuart Mill volume XXI Essays on Equality, Law, and Education.* Toronto: University of Toronto Press, 1984. Print.
Dickens Charles., George Ford., ed. *Hard Times An Authoritative text backgrounds, sources, and contemporary reactions criticism.* New York: W.W. Norton & Company, 1966. Print.

菊川忠夫『J. S.ミル 人と思想 18』清水書院 1966 年
J. S.ミル 山下重一訳注『評註 ミル自伝』御茶ノ水書房 2003 年
J.S. ミル 竹内一誠『大学教育について』岩波書店 2011 年
小泉仰 『ミルの世界』講談社学術文庫 1988 年
関嘉彦『世界の名著 49 ベンサム J. S.ミル』中央公論社 1995 年
マイケル・サンデル 鬼沢忍訳『これからの「正義」の話をしよう いまを生き延びるための哲学 *Justice: What's the Right Thing to Do?*』早川書房 2010 年
山田英世『ベンサム 人と思想』清水書院 1967 年